

選択必修科目（1年次）

産婦人科

I. 一般目標

産婦人科疾患に対し、正確な診断を下し、適切な治療を想定できる医師となるために、

- 1) 様々な産婦人科疾患の診療経験を積み、理解できる。
- 2) 分娩に関して正常分娩、異常分娩、帝王切開分娩を経験し、理解できる。
- 3) 産婦人科への紹介が必要な時はその判断ができるようになる。

II. 担当する診療科

産婦人科

III. 研修期間

2カ月（期間内に2週間の小児科研修を行う：時期は指導責任者と協議する）

IV. 指導スタッフ

	氏名	職名	医師登録年月	指導医講習
責任者・指導医	西本 秀明	産婦人科部長	1977.12	◎

V. 基本的な指導方法

1. 産科・婦人科の病棟を担当し、医療スタッフとして診療にあたる。
2. 指導医の外来に参加し、診療補助・検査補助を行う。
3. 指導医とともに、婦人科疾患の手術に助手として参加し、術後管理を行う。
4. 指導医について時間外診療業務を行う。

VI. 基本的週間スケジュール

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
月			外来診療				外来診療			
火			外来診療				手術見学・介助			
水			外来診療				手術見学・介助			
木			外来診療				外来診療			
金			外来診療				手術見学・介助			
土			外来診療							

VII. 行動目標（→p12）

VIII. 経験目標（→p13~21）

A. 経験すべき診察法・検査・手技

- (2) 医療面接：患者・家族との信頼関係を構築し、診断治療に必要な情報が得られるような医療

面接を実施するために、

- ・医療面接におけるコミュニケーションの持つ意義を理解できる。
- ・病歴の聴取と記録ができる。
- ・患者・家族への適切な指示・指導ができる。

- (3) 基本的な身体診察法：病態の把握ができるよう、全身にわたる身体診察を系統的に実施し、記録するために、産婦人科的診察ができ、記載できる。
- (4) 基本的な臨床検査：病態と臨床経過を把握し、医療面接と身体観察から得られた情報をもとに必要な検査を解釈するために、以下の検査の適応が判断でき、結果の解釈ができる。
一般尿検査、血算・白血球分画、血液生化学的検査、細胞診・病理組織検査、
内視鏡検査、超音波検査、単純X線検査、X線CT検査
- (4) 基本的治療法：基本的治療法の適応を決定し、適切に実施するために、
 - ・療養指導（安静度・体位・食事・入浴・排泄・環境整備を含む）ができる。
 - ・薬剤の作用、副作用、相互作用について理解し、薬物治療ができる。
 - ・基本的な輸液療法ができる。
- (5) 医療記録：チーム医療や法規との関連で重要な医療記録を適切に作成し、管理するために、
 - ・診療録をPOSに従って記載し、管理できる。
 - ・処方箋、指示箋を作成し、管理できる。
 - ・診断書、死亡診断書、死体検案書他の書類を作成し、管理できる。
 - ・紹介状・紹介返書を作成でき、管理できる。
- (6) 診療計画：保険・医療・福祉の各側面に配慮しつつ、診断書を作成し、評価するために、
 - ・診療計画（診断・治療・患者家族への説明を含む）を作成できる。
 - ・診療ガイドラインやクリニカルパスを理解し、活用できる。
 - ・入退院の適応を判断できる。
 - ・QOLを考慮にいれた統合的な管理計画へ参画できる。

B. 経験すべき症状・病態・疾患（→p15~16の一覧表参照）

患者の呈する症状と身体所見、簡単な検査所見に基づいた鑑別診断、初期治療を行う能力を獲得するために、

- ・緊急を要する以下の症状・病態を経験し、初期治療に参加できる。

流・早産および満期産

- ・経験が求められる疾患・病態（波線については自ら経験する）

妊娠・分娩、（正常妊娠、流産、早産、産科出血、産褥）、

女性生殖器及びその関連疾患（月経異常、不正性器出血、更年期障害、外陰・膣・骨盤内感染症、骨盤内腫瘍）

C. 特定の医療現場の経験

- ・周産・小児・生育医療

- 1) 周産期や小児の各発達段階に応じた適切な医療の提供ができる。
- 2) 周産期や小児の各発達段階に応じた社会心理面への配慮ができる。
- 3) 虐待について説明できる。
- 4) 学校・家庭・職場環境に配慮した地域との連携に参画できる。
- 5) 母子健康手帳を理解し、活用できる。